
光と影

kuroyumi

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と影

【Nコード】

N4854P

【作者名】

kuroyumi

【あらすじ】

根暗な少年、御影。太陽みたく明るい少女、光。ある日光が御影に向かって言った。「生徒会をつくらうっ!」・・・と。

初めの一步

天宮光^{ひかり}は悩んでいた。

騒がしいことに定評のある彼女が口をつぐみ、眉根にシワをよせて悩んでいた。

身を裂くような風が突如吹きすさぶ。

ふと視線をあげたとき、天宮の両目に”それ”が飛び込んできた。
「それだっ！」

バス停の人々が一齐に振り向く。天宮の前で新聞を広げていたおじさんが怪訝さ全開の顔で距離をとった。

しかし、そこは集中すると周りが見えない女王の異名をとる天宮。彼女の脳内はいま絶賛フル稼働で立った今花開いたアイデアを急速に捏ね上げていた。

だが、すぐに壁にぶち当たった。

この障害物を越えるには？

・・・#・・・

この日、天宮は派手に遅刻した。

その理由を考え事をしてました、で済まそうとした天宮は死ぬほど教師軍団に怒られたという。

これは彼女が中学3年の冬の出来事だった。

御影という少年

「生徒会つくろうつ！」

「いやだ」

御影^{みかげ}悠樹^{ゆうき}は視線を文庫本から離さず、すぱっと言い切った。

御影は自他ともに認める根暗だった（自分で認めてるあたり救いようがない）。彼も高校デビューなるものを多少なり考えはしたが、そこは御影。生まれ持ち、そして16年間培ってきた人見知り、はそうはたやすく彼を手放しはしなかったし、そして御影自身も変わることに積極的ではなかった。

結果、御影は御影のまま、こうして高校生活の幕をきることになった。

例え同姓でも初見だとあつぷと目を白黒させる御影は、当然ながらそう友人は多くない。男ならいざ知らず、女子ともなると空襲後の野原のほうはまだいくぶんマシといえるような有様だった。そんな御影に声をかける女子がいる。そしてその相手は一人しかない。

天宮光。

「ねえ、生徒会つくろうつよ」御影の切れ長の目を覗き込むようにして天宮が笑顔で元気よく言い放つ。

「そんな」一緒に帰ろう”みたいなノリで言われても、いやだ」

本から一向に目を離さず、そっけない態度を続ける御影。しかし天宮はさして気にするふうもなく手を後ろにちよんと組み、焦れているように身体をゆらゆら揺らした。

「入る部活決定済み？」

「いや」

帰宅部で通すつもり御影はこれまたそっけなく応じる。

ここで「そっちはどう？」などの定番の返しをすれば、会話多少は弾むだろうに、御影は天宮などお構い無しにページをめくった。

「じゃー手伝つてよ。そんなに難しいことするわけじゃないって。これから2人で職員室にいつて『生徒会つくらせてください』って言いに行くだけだよ」

「・・・正気なの？」御影はこの日初めて天宮の顔を見た。

見慣れた――自分に話しかけてくる変わり者の――天宮がそこにいた。

健康的な桃色の唇を不敵に持ち上げ、底なしの希望に輝く黒目がすつと横に伸びる。

「もちろんっ！」

当然だと言わんばかりの堂々とした返事に、御影はむうと口をつぐむしかなかった。

「誘うのおれじゃなくてもいいんじゃない？だれか別のひと誘いなよ」

「えー、でも中学校からの腐れ縁に頼ったほうがいいなっと思って思うし、それに大体まだこーゆーこと頼めるくらい仲いいひといないしさ」

仲いいひとがない、か。

御影は皮肉っぽく口角をあげた。澄んだ晴天のような天宮と、どこか鈍色の雲のような鬱屈な笑みを浮かべる御影。同じ「笑み」でも2人には天地ほどの隔たりがあった。

ただ、御影が嗜虐的に笑ったのにもわけがあったのこと。

「特技は友だちをつくることです」と履歴書に書けるほど天宮は人付き合いに卓越していた。なんのことはない。隣にだれかいたら「名前なに？」「どこ出身？」等々で足場をつくり、思わず微笑んでしまう快活な笑顔と明朗な口調で気づけばいつのまにか踏破完了だ。

単純なことだ。御影はいつも思う。ただその「単純なこと」が御影にはできない。どうしても踏み出せない見えない境界だった。天宮のように笑えなくても、せめて声をかけるくらいは、とも考えるだが、できない。そしてまた今日も一人。

自己嫌悪の沼に沈んでいく御影に天宮がきょとんと首を傾げる。

「無理かな？」

「うん。あきらめて」気分を切り替えられず、ぼそぼそと重い声で応じる。

「そっか・・・うん。ま、強制的にっつても悪いし・・・あ、でも、興味湧いてきたらいつでもいいから、ね」

視線を本に落とした御影に、上目遣いで天宮が確かめるように念を押した。

「ああ」と投げやりな返事が返ってくる。

「はい。全員席につけー。ホームルームHR始めるぞー」

天宮は見えない壁にこもってしまった御影の猫背姿をしばらく眺めていたが、教師の声に押されるようにして、出席番号の関係で前の前になった自分の席に歩を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4854p/>

光と影

2010年12月14日01時37分発行